

赤平市、士別市の市立病院を視察

日本共産党根室市議会議員団と無所属の久保田陽議員は、2月5日に赤平市の「あかびら市立病院」、翌6日に士別市の「士別市立病院」を視察しました。今週の市議団ニュースでは、視察内容について、報告書をもとにお知らせします。



(撮影・橋本竜一議員)

「市立根室病院」の経営改善が「待ったなし」の状況の下で、議会議論の中で的確な提案ができるようにと、今回の視察を企画しました。

あかびら市立病院

2006年度に赤平市の財政が危機的状況となり、2007年度には市立病院が29億4936万円という莫大な資金不足に陥りました。それでも、多くの市民が「病院を残してほしい」と願い、病院を維持するために、経営健全化計画のもと、病床削減やそれに合わせた人員体制の削減、大幅な給与カットなどにより、約2億円の削減を図るなどの改革を進めてきました。2011年度に黒字に転じてからは、8年連続で(実質)黒字化を達成しています。

そのために、経営や財政状況について、十分な情報共有を図り、病床稼働率95%以上とそれを達成するためのベッドコントロールを経営の重点課題として、医師・看護師などの医療スタッフと事務方が同じ方向を向いて、また、

市財政当局も一体になって改革に取り組んできました。

また、赤平市民のみならず自主的に病院ボランティアとして、50名以上の方々がタオル畳みや病院案内のほか、食堂の運営に関わるなど積極的な取り組みを行っています。

士別市立病院



(撮影・橋本竜一議員)

士別市でも高齢化と人口減少が進む中で、地域の医療ニーズに対応するために療養病床を導入し

急性期から慢性期・回復期への転換を図ってきました。それとともに、地域センター病院の名寄市立総合病院との連携を強化し、医療機能のすみわけを図りました。脳血管疾患の患者を救急隊員がトリアージ(患者の重症度に基づいて、治療の優先度を決定して選別を行うこと)して名寄に直接搬送するシステムや、大腿骨骨折患者の地域医療連携パスの導入などにより、入院患者の増加につながりました。収益が安定向上した結果、2017・18年度に1・5億円の純利益を計上し、一般会計からの繰入金も減少しています。

病院長が先頭に立ってこれらの改革を推進してきました。また、事務職が副院長に就任(全国的にも珍しいケース)し、経営面や改革推進で院長をサポートしています。医療と介護の連携として、市が「ワールドカフェ」の開催や、ケアマネ連携シートの活用など、情報共有の推進を図っています。

一方で、2005年度に28名いた常勤医師が2018年度には8名になり、医師の確保は緊急の課題となっています。病棟の看護助手の確保も難しい状況で、業務負担軽減のために入院時の日用品アメニティセットのレンタル業者が参入していません。

視察を終えて

地理的条件の違いなど、根室との比較は簡単にはできませんが、経営改善に向けて、大変多くのヒントを得たように思います。

今回視察させていただいた赤平、士別の両病院に共通していたのは、どちらも地域の実情、ニーズに見合った病院に変えていったことです。さらに、経営改善のために強いリーダーシップを発揮する方がいて、それを支える病院スタッフはもちろん、市行政、そして市民のみなさんが、「ワンチーム」になっていたことを強く感じました。